

# ナイロビ国立公園およびその周辺におけるヒョウと人々のかかわり

平成18年入学  
派遣先国：ケニア  
山根 裕美

キーワード：ヒョウ、ケニア、ナイロビ国立公園、地域住民、野生生物保全、

## 対象とする問題の概要

ナイロビ国立公園は、東アフリカの国際都市であるナイロビからわずか10 kmに位置する都市に隣接した国立公園である。その国立公園周辺において食肉目による家畜や近隣住民への脅威といった被害が多く報告されている。この地域で多い被害は、ライオン、ヒョウ、ハイエナの3種であり、その中でもヒョウは単独性であり夜行性動物であることから、その遊動域や狩猟行動についての調査は少ない。さらにナイロビ国立公園内における生息数は明らかになっていない状況である。また、観光客や観光業従事者からは大変貴重な動物として扱われる反面、居住地を共にする人々にとっては害獣となりうる二面性をもった種であることから、人々とのかかわりは興味深いものである。

ナイロビ国立公園に隣接した地域に住む人々にとって、野生生物と人々の間にどのようなかかわりがあり、1946年に公園が設立されてから現在にいたるまでの変化にも注目する必要がある。

## 研究目的

ナイロビ国立公園および周辺におけるヒョウの生息数および行動を明らかにすることで、周辺地域に居住する人々との摩擦の原因を追求し被害対策について言及する目的がある。

周辺地域にはマサイの人々を中心とした小規模な牧畜と、近年多くみられる商業的な大規模牧畜が営まれており、ヒョウによる家畜被害が増加している。2006年9月、ヒョウの母親が殺されその子供が孤児となって動物孤児院に引き取られてくる事例があった。また、ケニアでは1977年より野生生物の狩猟が禁止されていることから、野生生物の被害対策には大きな関心が寄せられている。ヒョウの行動や生息数について不明な点が多い。それらを明らかにし、周辺地域に住む人々、ケニア野生生物公社、観光業従事者などといった、野生生物にかかわりのある人々との様々な関係について分析していく目的がある。



母親が地域住民に殺されてしまい、  
孤児となってナイロビ動物孤児院に  
引き取られてきた子供のヒョウ  
(推定生後10日)

## フィールドワークから得られた知見について

ケニアにおける野生生物保護は西洋から持ち込まれた概念であったが、1977年ケニア国内での狩猟が全面的に禁止されるなど、野生生物を貴重な自然資源としてケニア独自の野生生物保全を展開していることが2007年に実施した調査よりわかった。野生生物保全を実施していくうえで最も重大な課題となっているのが、野生生物とその居住地を共にしている地域住民との関係である。

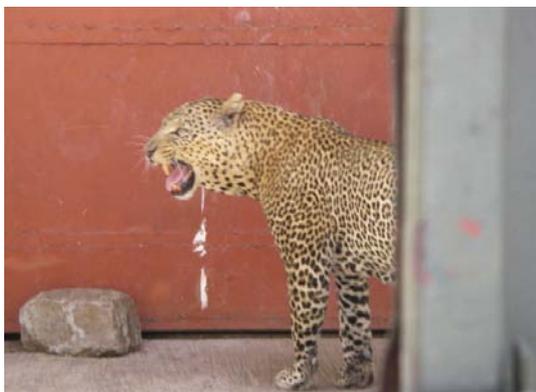
ナイロビ国立公園とその周辺におけるヒョウ (*Panthera pardus*) と地域住民の関係に注目して調査を行った。この地域ではライオン、ハイエナ、ヒョウによる被害が最も多く確認されており、地域住民との間で家畜被害及び人への脅威などといった問題を引き起こしていた。害獣駆除のために野生生物を殺すことをしないため、地域住民の不満が増大している反面、観光資源として重要視されている野生生物の有効利用について、地域住民とケニア野生生物公社の間で、たびたびミーティングが開かれるなど、緩和策が繰り返し論じられていた。本フィールドワークでは、難しいとされていたヒョウの捕獲に成功し、GPS首輪の装着を行った。捕獲したヒョウがメスの若い個体 (推定2歳から3歳) であったことから、すくなくとも周囲地域にこのヒョウの母親、父親、および兄弟1個体が生息している可能性が示唆される。GPSの装着により、困難であったヒョウの行動を観察し、どのような頻度、時間帯、季節に家畜を襲い、地域住民との間に問題を引き起こしているのかということを知ることが可能となった。ヒョウはその単独行動と夜行性であるという特徴から、被害への対応が難しいとされていた。また、ナイロビ国立公園とその周辺におけるヒョウの個体数も未知数であったが、フィールドワークに個体数の確認および生息域評価などを進めている。ヒョウの直接的な目撃数は少ないものの、爪痕、足跡、食べ残しなどといった間接的観察に成功している。



ナイロビ国立公園で捕獲したヒョウ



GPS 首輪の装着



ナクル市周辺で、害獣として捕獲されナイロビに連れてこられたオスのヒョウ。歳老いて犬歯などが欠けていた。

## 今後の展開・反省点

今回の調査では、ヒョウの捕獲するにあたって様々な特徴が明らかになった。今後はGPS首輪より得られるデータをもとに、ヒョウの追跡を実施し、地域住民との関係をさらに明らかにしていく。また直接観察を試みるとともに糞や毛の採取および寝床の確認などを実施していくことで、どのような割合、頻度で家畜と野生動物を捕獲しているのかが明らかになると予想している。また、同時にナイロビ国立公園周辺の地域住民を訪問し、実際の被害についてその状況、時間帯、季節性などについて聞き取り調査を実施することで、ヒョウの実際の行動と地域住民の証言の二側面を突き合わせて、その関係について分析していく。さらには、地域住民はヒョウに対してどのような感情を持っており、それは時代とともにどのように変化してきているのかなど時系列的に追っていく計画である。